

# 第6章 原の辻遺跡出土骨角器

松本圭太

## 1. 鹿角製ヘラ状製品

東亞考古学会による調査で出土した骨角器は2点であり、いずれも鹿角製ヘラ状製品である（図115、図版70-3）。いずれも出土年度や地区、層位は不明であるが、1961年出土遺物と同一の箱で保管されていたことから、同年出土の可能性がある。697は残長12.3cm、最大幅2.6cm、最大厚1.1cm、重量21.4gである。鹿角素材を縦に半裁した後、切断面と両面の先端を丁寧に研磨する。柄部は欠損している。698は残長9.7cm、最大幅2.6cm、最大厚1.0cm、重量17.0gである。こちらは逆に刃部を欠き、柄部を中心に残す。鹿角素材を縦に半裁し、両側面、表面および、内面端部を丁寧に研磨する。上部端はやや薄く加工され、内側に若干の反りを持たせる。697・698は現状では接合しないが、同一個体の可能性がある。

## 2. 原の辻遺跡出土鹿角製ヘラ状製品の位置づけ

ヘラ状製品としては、原の辻遺跡において「アワビオコシ」とされる鯨骨製品が一定数知られている（中尾2005b）。この種の鯨骨製品を「アワビオコシ」とし、銛とともに漁業活動の道具として指摘したのは岡崎敬である（岡崎1968）。同種のものは、カラカミ遺跡でも多く確認でき（例えば主税ほか2013）、唐津市雲透遺跡（仁田坂編1998）でも発見されるなど、西北九州の沿岸地域部に濃密に分布している（中尾2005a）。また、こうした「アワビオコシ」の数量やバリエーションの増加、鉄製のものの出現が、アワビ、ひいては真珠の獲得率向上を示していると考える意見も存在する（下條1998）。また、鯨骨製「アワビオコシ」は、西北九州型結合式釣針などとともに縄文時代の西北九州地域に系譜を持ち、それが朝鮮半島や日本海沿岸に展開するようになったと考えられている（中尾2011）。

しかしながら、素材や形態からいって697や698に最も近いものは、鳥取市青谷上寺地遺跡（図116-4、5）や韓国勤島遺跡（図116-1、2）で多く出土した鹿角製品であろう。中尾氏は鯨骨製「アワビオコシ」とともに鹿角製ヘラ状製品に言及し、後者について以下の2類に区分した（中尾2005）。

A類：半裁した鹿角を用い、先端部を中心に薄く仕上げたもの。

B類：基部に角座を取り込み体部以下を半裁して薄く仕上げたもの。角座を丸ごと取り込んだものがB-1類、半裁して取り込むものがB-2類と細分される。

697は欠損品で判別できないが、698はB-2類に相当する。勤島遺跡A地区で出土した鯨骨製ヘラ状製品は1点のみであり、他は鹿骨製（2点）と鹿角製（10点）（武末2008）で、鯨骨製が大部分を占める西北九州とはコントラストをなしている。また、勤島遺跡から北部九州系の弥生土器が出土することなどから、西北九州の鯨骨製品が、勤島遺跡で材質転換した可能性が示唆されている（武末

表4 原の辻遺跡出土骨角器観察表

遺物番号	調査年	出土区・層位	器種	残長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
697	1961?	不明	鹿角製ヘラ状製品	12.3	2.6	1.1	21.4
698	1961?	不明	鹿角製ヘラ状製品	9.7	2.6	1.0	17.0

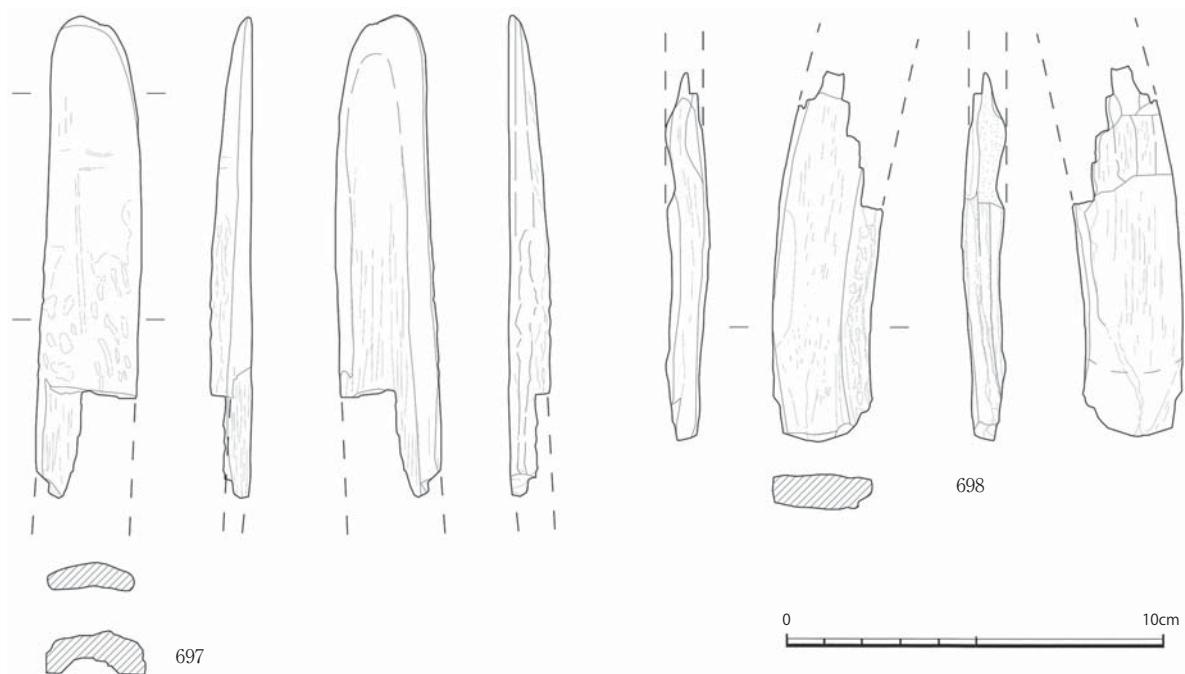


図115 原の辻遺跡出土骨角器

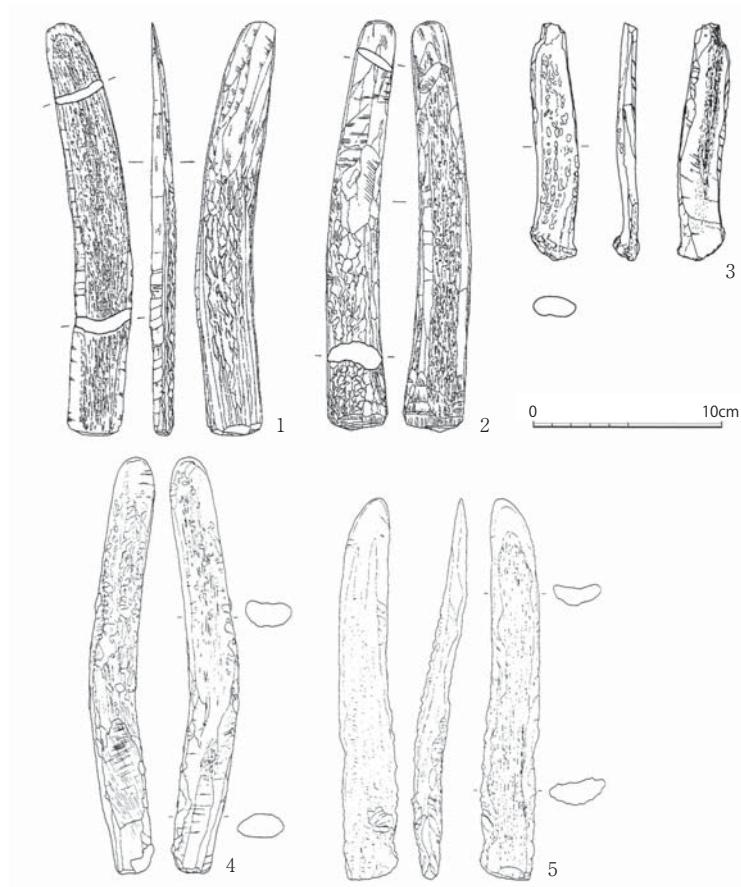


図116 各地の鹿角製ヘラ状製品  
(1、2:勒島遺跡、3:雲透遺跡、4、5:青谷上寺地遺跡)

2008)。また、青谷上寺地遺跡の鹿角製品についても、北部九州の鯨骨製がもとになったことが指摘されている(中尾2005b、武末2008)。なお、鹿角ヘラ状製品は、西北九州でも少ないながら、唐津市雲透遺跡(仁田坂編1998)(図116-3)や下関市綾羅木郷遺跡(田中1981)でも出土している。あるいは、形態はやや異なるものの、カラカミ遺跡出土品(主税2011、図80-478)も類例の1つとして位置づけられるかもしれない。

武末氏も指摘するように、鹿角製ヘラ状製品は勒島遺跡と山陰地域に見られる一方、西北九州には希薄であり、空間的につながりにくいという問題が存在した(武末2008)。697・698は、壱岐島出土としては初めて報告される鹿角製ヘラ状製品である。出土地点・層位が不明な点が惜しまれるが、こうした問題に一石を投じるものとして、また当時の半島・西北九州・山陰の海岸ルートを繋ぐ上で極めて重要な資料であると考えられる。

## 引用文献

- 岡崎敬1968「倭の水人」『日本民族と南方文化』平凡社、pp.93-125  
下條信行1998「倭人社会の生活と文化」『古代を考える 邪馬台国』吉川弘文館、pp.247-264  
武末純一2008「韓国・勒島遺跡のアワビおこし」『九州と東アジアの考古学 上巻』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、pp.93-110  
田中良之1981「骨角牙器」『綾羅木郷遺跡 発掘調査報告 第1集』下関市教育委員会、pp.477-480  
主税英徳2011「出土骨角器」『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、pp.113-119  
主税英徳・金民善・末廣いづみ2013「出土骨角器」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、pp.120-129  
鳥取県埋蔵文化財センター編2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5 骨角器(1)』  
中尾篤志2005a「鯨骨製アワビオコシの拡散とその背景」『西海考古』第6号 pp.85-101  
中尾篤志2005b「骨角器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会、pp.199-202  
中尾篤志2011「九州地方の骨角器」『弥生・骨角器サミット』鳥取県埋蔵文化財センター、pp.38-45  
仁田坂聰編1998『雲透遺跡(I)』唐津市教育委員会

## 図版出典

- 図116 1、2: 武末2008-図1-6、10、3: 仁田坂編1998-Fig 54. 21、4、5: 鳥取県埋蔵文化財センター編2010-図27-243、245